

してくれんと云ふ勢い。大蛇はナニクソ、殿様と大蛇と敵合。ところが國が大きいと云ふと甚いもので末座に控へて居りましたのが牧野彌兵衛。此の手柄から牧野兵庫守と守名を頂きました。其のお屋敷が未だ和歌山丸の内に残つて御座居ます。紀伊家に傳はる静の一派と申します身と穂が四尺柄が四尺八尺ある薙刀をお預り申して居ります。殿様の御身の上如何と思ひまして其薙刀をリユウ〜と打振り（鳴物早舞）殿様と大蛇の眞中に憶も怯れず進みまして大蛇の口元へ其の薙刀を從貫抜に宛行ひました之れは彌兵衛の早速の頓智で御座ります。何程大蛇の口が大きうても天地八尺の口は開けまへん大蛇は八尺の貫抜を入られたものですさかい前へ出る事は出来まへん。彌兵衛は殿様を視上げて「御前。」

と手を揚げますと、殿様は笑を含んで彌兵衛の顔をば眺め手綱をば小指でシヤン〜とお引きになると馬は後退を致しました。蹄音高く五、六間大蛇から放れました。サア斯うなると彌兵衛はん威張り出しました。家中の者多しと雖ども、今日は拙者程手柄を爲したる者は有るまいと云ふ顔をして

「如何に邪性の物、汝性根があれば今牧野彌兵衛の申す事、耳をさらへて……………」
あのお客さん蛇に耳がありましたかいな、耳を云はんと科自せりふになりまへん。

「能く承はれツ……………勿體なくも是に座たまらせ賜ふは、清和源氏の御大將八幡太郎義家公の末孫にて
東照宮家康公が身内に於て紀伊の國名草郡虎伏山竹垣和歌山の御城主、其碌高五十五萬五千石、紀

伊大納言頼宣公成るぞ。普天の下卒土の濱大路ならざる事なければ其國の上に従ふべきはづ、それに何ぞや草びら喰はみて生長らへたる蛇性の類屬にて今日我君之御清興を妨げ致すや退しりぞかすんば、今牧野彌兵衛が靜流の薙刀の斬味を知してくれん、汝見事受けられるなら受けて見よ。（鳴物一聲）と彌兵衛大蛇と組つ轉びつ戦いましたが、彌兵衛斯んな蛇身の長い奴と何時迄逆ふて居ても此方の身體がもたぬ。氣轉を利かして大蛇がゴ〜と延びて来る奴を體を透して横へ寄りましたので、蛇は不意を喰ふて向ふへ行き過ぎました。アレと大蛇が後を向いた所を待つてましたと彌兵衛はん薙刀の石突で大蛇の鼻柱をポカンと撲ちました。見る／＼内に大蛇の鼻からドク／＼／＼と鼻血が流れ出しました。矢ツ張是れが鼻血と云ふので御座いますか。蛇は目がくらんで來たのでポツ／＼逃げ出しましたので彌兵衛隙さず薙刀を其場へ置き、懐劍を取り出し口に啞へて富士の牧狩仁田の四郎は斯う云ふ具合であつたかと云ふ振りを仕まして、大蛇の首筋を引き掴みました。大蛇は前方へ逃げ様と致します。彌兵衛は逃がさじと致します。

「コラ、大蛇何處へ行きやがんねン。」

「彌兵衛ハン、一寸お用便へ。」

「已れ遣つて成るものか。」

蛇の首筋の鱗へ手を掛けて引張ります。蛇は逃げ様とする勢ひで首筋の鱗が三枚抜きました。呪と云ふものは不思議なもので、大蛇の鼻血がチャンと止りました。（完）